



TITLE:

# 術後肺転移像の自然退縮を認めた腎細胞癌の1例

AUTHOR(S):

吉野, 修司; 和久井, 守

---

CITATION:

吉野, 修司 ...[et al]. 術後肺転移像の自然退縮を認めた腎細胞癌の1例. 泌尿器科紀要 1988, 34(12): 2167-2169

ISSUE DATE:

1988-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/119808>

RIGHT:

# 術後肺転移像の自然退縮を認めた腎細胞癌の1例

取手協同病院泌尿器科 (部長: 和久井守)  
吉 野 修 司\*, 和 久 井 守

## SPONTANEOUS REGRESSION OF LUNG METASTASIS OF RENAL CELL CARCINOMA: A CASE REPORT

Shuji YOSHINO and Mamoru WAKUI

*From the Department of Urology, Toride Kyodo Hospital  
(Chief: Dr. M. Wakui)*

A chest X-ray tomography revealed a metastatic shadow in the left lung of a 56-year-old man with pathologically established right renal cell carcinoma. The shadow was found to be regressed to a fibrous lesion on the 18th day after radical nephrectomy. Because of non-A, non-B, hepatitis, the anticancer treatment with  $\alpha$ -interferon and 1-(2-tetrahydrofuryl-5-fluorouracil) was started 40 days after the nephrectomy. At that time, only a fibrous lesion was noted at the site of lung metastatic shadow. At present, the patient remains free of disease for 21 months after nephrectomy. (Acta Urol. Jpn. 34: 2167-2169, 1988)

**Key words:** Spontaneous regression, Renal cell carcinoma

### 緒 言

腎細胞癌は、転移巣が、稀に自然退縮を示す点で特異的な癌腫と言える。われわれは、術前に左肺に転移を認めたが、原発巣摘除後に自然退縮を示した腎癌の1例を経験したので報告する。

### 症 例

患者: 56歳, 男性  
主訴: 顕微鏡的血尿

現病歴: 1985年9月食欲不振にて当院内科受診し、腹部CTを施行したが、脾臓の軽度腫大を認めたのみであった。この際腎下極は範囲外であった。同科外来で経過観察していたが、顕微鏡的血尿を認めたため腹部超音波検査および腹部CTを施行し、右腎下極に7×7×5cmの腫瘤を認め(Fig. 1)、右腎腫瘍との診断で1986年1月20日当科入院となった。

入院時身体所見: 体格中等度、栄養状態良好。右腎下極部に一致して腫瘤触知し呼吸性移動あり。表在リンパ節触知せず。

入院時検査所見: 血算、一般生化学正常、CRP(±)、血沈、 $\alpha_2$ -globulin は正常。

胸部断層写真 背面より9~10cmで左肺s6に2×1cm結節状陰影を認めた(Fig. 2.a)。胸部CTも同様であった。

その他、画像診断的には肝囊胞を認めた。

腎動脈造影: 右腎下極に、hypervascularityを示す腫瘍を認めた(Fig. 3)。造影後、無水エタノールおよびスポンゼにて塞栓術を行った。

術前診断として、右腎細胞癌、T2N0M1、左肺の転移巣は、腎摘後、患者の回復を待ってから肺下葉切除予定とした。

手術所見: 1月31日全身麻酔下にて経腹式腎摘術を施行した。周囲への浸潤はなく、明らかに腫大しているリンパ節が無い。ため郭清はせず腎門部リンパ節生検にとどめた。

病理所見: 腫瘍断面は黄色で中央部に、一部壊死を認めた。被膜は保たれており組織はclear cellより成り(Fig. 4)リンパ節は正常であった。PT2bN0M1と診断した。

2月17日胸部断層写真にて転移巣はほとんど消失し線維化を思わせる陰影のみとなった。同時に、輸血後肝炎を併発したため積極的な治療をせず肝機能の改善した3月21日よりHLBI 300万単位、UFT 3cap投与開始、3月18日の胸部断層写真で左肺の異常陰影は完全に消失し(Fig. 2.b)、以後3ヵ月HLBIを1,200

\*現: 癌研究会附属病院泌尿器科



Fig. 1. CT: 右腎下極に腎胚を圧排する腫瘤を認める。

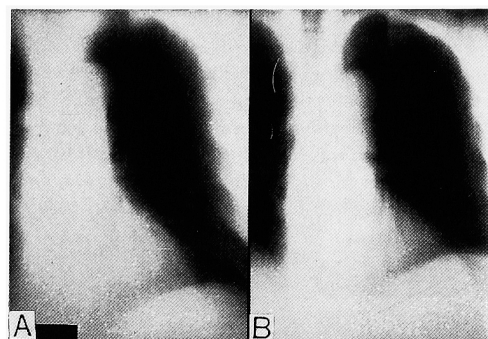


Fig. 2. 胸部断層撮影: (a) 術前左下肺野に腫瘤陰影を認めた. (b) 術後(3月18日) 転移巣は消失していた。

万単位まで増量した後中止し, UFT のみで1987年10月まで経過を追っているが再発は認めていない。

## 考 察

腎細胞癌は、画像診断の発達により low stage で発見される症例が増えてきたが、病的骨折などの転移巣による症状から発見されることも稀でない。Fair-lamb ら<sup>1)</sup>によれば腎癌転移巣の自然退縮を自験例も含めて考察し、その転移巣の内訳は、67例中肺が60例(93.4%)と最も多く骨3例(4.5%)皮膚、大腿、肝、消化管1例(1.5%)となっており肺における自然退縮例が圧倒的に多い。これは、単に肺転移の症例が多いだけでなく肺のマクロファージ、リンパ球、IgAなどの免疫機構が発達し、逆に骨は発達していないため自然退縮例が少ないとする意見がある<sup>2)</sup>。本症例でも腎摘あるいは輸血後肝炎により免疫系を賦活されたための自然退縮と考え得る<sup>3)</sup>が術前、術後に免疫能を評価しておらずなんともいえない。

自然退縮の様式は、Selwyn ら<sup>4)</sup>によれば51例中38例(74.5%)が腎摘後退縮、7例(13.7%)は腎摘後、

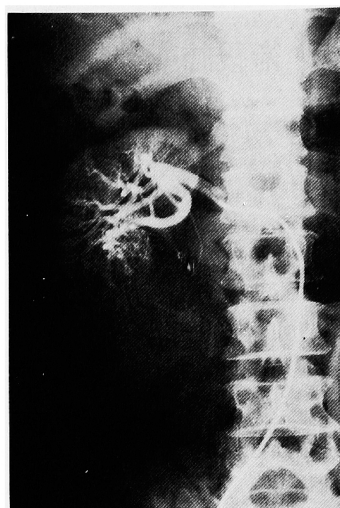


Fig. 3. 選択的右腎動脈造影: 右腎下極に腫瘤陰影を認めた。



Fig. 4. 腎細胞癌の組織像: clear cell carcinoma, alveolar type を示した。

転移巣が出現しその後自然退縮、4例(7.8%)は腎摘後、放射線治療を renal bed に施行した後、転移巣が退縮、2例(3.9%)は腎摘前に退縮したと報告している。ただし自然退縮を認めても他の部位に転移巣が出現することがあり、経過観察が重要であることにかわりはない。

本症例は腎摘後退縮した点および対象となった臓器が肺という点で一般的なタイプであるが、肝炎との関連性において興味深い。

自然退縮は腎腫瘍の治療、特に免疫療法を考える上で興味深い現象と考えられるが、症例が少なく未だ不明な部分が多くこれからの課題と考えている。

本論文の要旨は第6回茨城県農村医学会において発表し、御協力頂いた当院内科湊志仁先生に深謝するとともに、御校閲頂いた東京医科歯科大学医学部大島博幸教授に深甚なる謝意を表します。

## 文 献

- 1) Fairlamb DJ: Spontaneous regression of metastases of renal cancer. *Cancer* **47**: 2102-2106, 1981
- 2) McLaughlin AP and Gittes RF: Spontaneous tumor regression. *Urology* **3**: 544-551, 1974
- 3) Pontes JE: Immunotherapy in the treatment of metastatic renal adenocarcinoma. In:

Tumor of the Kidney. Edited by deKernion JB and Pavone-Macaluso M. Volume **13**, pp. 274-275, Waverly Press, Inc, 1986

- 4) Freed SZ, Halperin JP and Gordon M: Idiopathic regression of metastases from renal cell carcinoma, *J Urol* **118**: 538-542, 1977

(1987年12月21日受付)